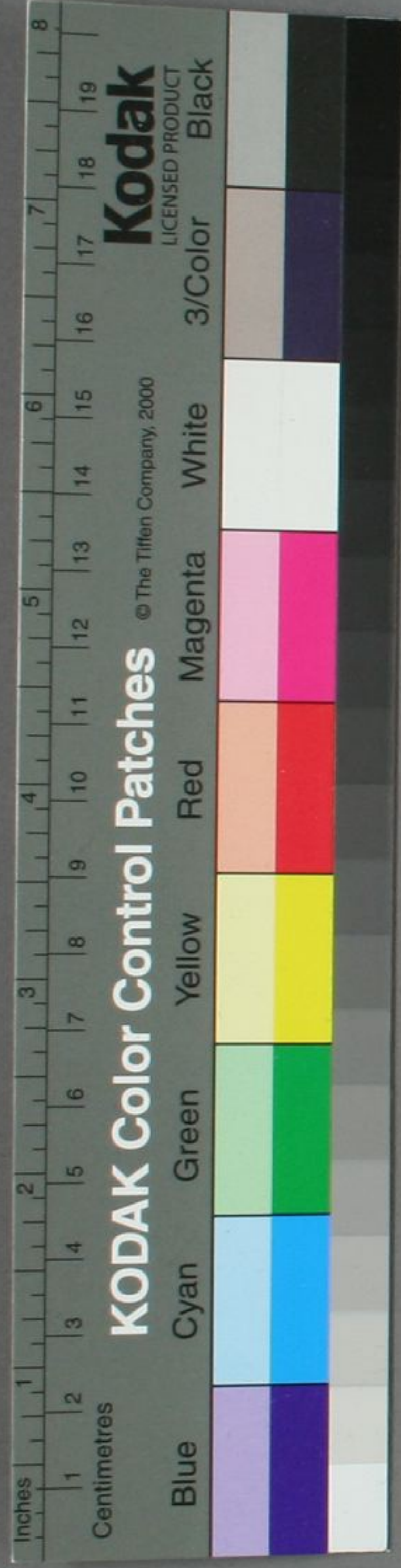


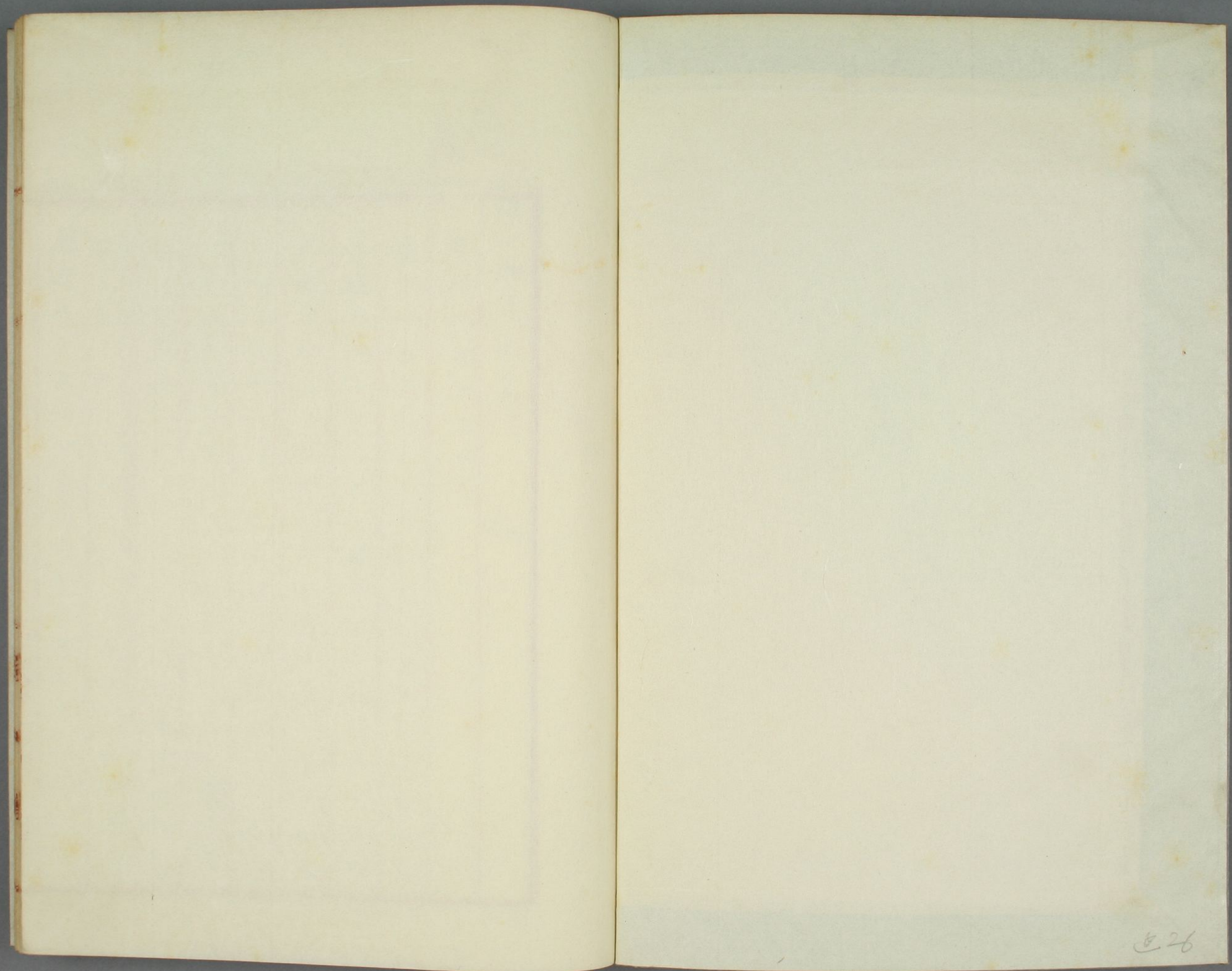


歷代財産遺詔

全

和装本
76
6281





宮內省

宮內省

26
6281

後一條院天皇

〔左經記〕類聚雜例

長元九年六月十九日丙寅天晴、關白左大臣、內大

臣、藤大納言、中宮大夫、權大納言、新大納言、民部

卿、權中納言、定、右宰相、中將、右大辨、右兵衛督等

參會一條院、被行故院御處分事、先以朱雀院、冷

泉院、及庄園等書注可被度當代後院之由、次書

出可被奉女院中宮并宮々之御物等、上民部卿依

資業朝臣書之、依為吉日、只入夜以後、院別當定

經朝臣且被奉沙金等於女院拜宮々、院沙金七

○當代後院、後
朱雀院天皇後院



去五味均平藏



(八六)

齊余兩、中宮四百兩、一品宮二百兩、巡方御帶一腰、

及亥刻退出

新嘉坡

壽元庚午六月

白話大佛言中言大

卷之四

卷之四

卷之五

卷之四

亥 亥 亥 退 出

齊院二百兩有文玉

卷之四

天翻地白土大烈凶大

辭天陽言保大陽言百勝

中國古大經可并漸替並

卷之四

卷之六

Blank page with faint vertical red lines.

18

帶一腰

卷之四

(七大)

後十條院天皇

範國記

長元九年十二月二十二日

次被下後院宣旨、先被奏度文、殿下以余所令奏給也、其狀云、

後一條院

奉度御領所等事

朱雀院

冷泉院

香原院

五條院

福地御牧

會賀御庄

卷之四

四

會

神崎御庄

庶忍御庄

右奉度如件

年 号

高倉院天皇

〔玉葉〕

治承五年二月四日巳辛雨降、朝間雪下、傳聞、故高

松院御庄、并京地等、被讓、獻、故建春門院、仍高倉

院御傳領、而登霞之刻、被奉處、分中宮、之由時忠

卿申、法皇御處分之實否難知、不聞、分明之仰、中

陰之間、號中宮、令旨、推以奉行、法皇內心不說云

々

○高松院
妹子內親王、鳥羽
院天皇皇女、二條
院天皇中宮、安元
二年六月崩
○建春門院
平滋子、後白河院
天皇女御、安元二
年七月崩
高倉院天皇御母
○中宮
平德子、高倉院
天皇中宮

後白河院天皇
〔玉葉〕
建久三年二月十八日辛酉雨下終日不止未明行幸於法皇宮六條西院亭蓋被訪御慍也○中余自閑路參會六條殿○中申刻還御之後丹二品為法皇御使參上有被申事等余依二院御氣色候御前故承詔旨依女房示也白川御堂等蓮華王院法華堂鳥羽法住寺等皆可為公家御沙汰自餘散在領等宮達有分給事等隨聞食及面々可有御沙汰云々此外今日吉今熊野最勝先院後院領神崎豐原會賀福地等皆可為公家御沙汰但金剛勝院一所可為般若富門院領云々

此御處分之體、誠穩便也、鳥羽上皇者、普通之君也、而於處分者、尤遺恨、併被委謝美福門院、法皇崩後、女院被分獻公家、御宇也、也、後鑒之所、覃法皇之御耻也、而今法皇於遺詔者、已勝保元之先跡、百萬里人之賢愚得失、誠無定法事歟、
九月二日、晴、略中以宗賴朝臣、仰合城興寺事於左大臣、
三日、晴、以忠孝朝臣、仰神宮上卿之間事於內大臣、
大臣、內也、又仰合城興寺事、

四日、略中忠孝朝臣來、示內大臣返事、略中又

(七六)

城興寺事所望之人々、皆以無所據、只可為後院領也、不可為異議云々、宗賴朝臣申左大臣返事、城興寺事、三人所被申、皆有謂、又無據、所詮可在御定、但法皇御知行未處分、而崩御、公家御沙汰宜歟云々、兩府申狀、已以符合道理可然事歟、問狀二八、若可為後院領哉否之條、一切不仰也、

宮內省

(七大)

(六)

新集國朝文庫

③ 庄

同國學堂

在文藏等

the 17th

那智造營可為他國役

10

○大宮院
藤原姑子後嵯峨
院天皇中宮
後深草院龜山院
兩天皇御母

大宮院御分

龜山殿 淨金剛院庄園目錄在別

宗形庄

准后分

播磨國西河庄 故院法華堂領也可有庄号

同國小室庄 同國厚利別府

讚岐國圓座保 一郡可有知行

二品分

越前國大屋庄 播磨國印達南原

讚岐國井部郷

(七六)

○圓滿院宮
因助親王後嵯峨
院天皇皇子

圓滿院宮

各為新法華堂領永代可令知行
近江國三村庄 一期之後可返付門跡

豐後國植田庄

如來壽量院 樂草院

讚岐國河津郷

宸筆

文永九年正月十五日

宸筆

各守此旨不可有相違 在御判

宮内省

(七五)

[illegible]

(七)

後峨嵋院未畢

增鏡

第十加川

十七日〇二の朝より御けしきかはるとて、善
 智識めさる、けいかい僧正、往生院の聖なとま
 いりてゆ、しき事ども聞えしらすべし、つゐ
 にその日のとりぬ時に御年五十三にてかく
 れさせ給ぬ、後嵯峨院とぞ申める、ことしは文
 永九年なり、〇中略故院〇嵯峨の御日數もほと
 うすぎ給ぬ、世中は新院〇深草かくておはしま
 せば、法皇〇嵯峨の御かはりに引うつてさぞ

あらむと、世の人と思聞えけるに、當代山龜の
御ひとつすぢにてあるべきさまの御おきて
なりけり、長講堂領、又はりまの國、おはりの熱
田の社などをぞ御そぶんありける、

梅松論

爰に後嵯峨院寛元年中に崩御の刻、遺勅に宣
く、一の御子後深草院御即位有べし、おりゐの
後は長講堂領百八十ヶ所を御領として、御子
孫永く在位の望をやめらるべし、次に二の御
子龜山院御即位ありて、御治世は累代敢て斷
絶あるべからず、子細有に依てなりと御遺命
あり、

○寛元年中
後嵯峨院天皇ノ
崩御ニ次ル九年
天皇ノ讓位ハ寛
元四年ナリ

○コノ豫狀ハ天皇
ノ御子伏見院天
皇ニ就テ給ヒシ
モノリ

○新院
後伏見院上皇
御子伏見院天
皇ニ就テ給ヒシ
モノリ

○故入道太政大臣
西園寺實氏東
二條院父

後深草院天皇

〔伏見宮記録文書〕_七

長講堂以下管領所々、不_レ漏_二一所_一可有_二御管領之
由、先度申候了、勿論候、
長講堂者第一大事候、能々可_レ被_レ留_二御意候_一、委細
猶別可_レ注申候、
法金剛院、自元御沙汰勿論候、但長講堂領播磨
國等御管領候者、此をハ新院へも被_レ申付、尚々
子細先日粗令_レ申候き
此富小路亭、故入道太政大臣讓進東二條院地

〔御記録〕

○東三條院

藤原公子、西園寺
實氏女、後深草
院天皇中宮
嘉元二年正月崩

○遊教門院

姪子内親王、後深
草院天皇皇女
後宇多院天皇皇
后、佛母東三條院

○准后

藤原相子、西園
寺公相女、後深
草院天皇後宮
陽德門院御母
○陽德門院
姪子内親王、後
深草院天皇皇女

也、然而於今者、數代皇居、多年仙洞也、隨而女院
所被臨、勿論候

伏見故女院御沙汰候、近年被申付遊義門

院候、當時無子細候、是、長講堂候、不可離本所、

不可有別相傳之儀候、

土御門第、讓賜准后、相子、定讓進陽德門院歟、

不可有子細、但此處始終不可為私領、已稱新長

講堂、本堂有事之時、佛事等委移行之上、修理足

長講堂領也、本所進止勿論事也、

有栖川西亭、讓賜准后、相子、事、東亭、粟田口

○大宮院

藤原相子、後深草
院天皇中宮
○准后貞子
四條貞子、四條隆
衡女、西園寺實氏室
大宮院、東三條院母
○永福門院
藤原鐔子、西園寺
實氏女、伏見院天
皇中宮

屋地右府入道此替申給候、ハ、是ハ我分にて

こりあらめふと、故女院被仰候き、實にも非無

子細、但女院、無被讓進遊義門院之儀、而、可被

修理之由被仰候き、無左右不可然之由、返答了、

而、可修理之由、自是申候由ふと被仰候けり、存

外候、東亭為女院管領者、院常御幸ふと候者、為

准后、定違亂歟、不便々々、可何様歟、可有御計候、

天王寺遍照光院并葺屋堺等庄、相副大宮院御

書并准后、貞子、狀、可讓進永福門院、先日申候了、

不可有相違者也、葺屋庄者長講堂領也、於寺役

聽役不可違日來、但堺庄遍照光院役不可怠者也、

播磨國御管領勿論候、分國讓付太不可然事也、然而文永別讓賜已可謂相續也、但一回候間不可被改吏務、

條々大概如此、可有御意得候也、

嘉元二年七月八日

龜山院天皇

龜山院御凶事記

竹林院左府西園寺公衡公記

嘉元三年九月廿三日、丁卯、天晴、依可分進、故院

御書、早旦著直衣鳥帽、相具御書御手箱□□御存

日予預置也、御所、略、中次、仰左衛門權佐藤朝召

寄御手箱、廳官□俊召寄也、候女院御方簾中、

藤朝就簾下進之、予於女院御前披封、故院勅封也

先撰出女院御分、細々御書、都合七通、并宮御方御分、一通在寺領、同大二卷、

等、進入御前、次、手箱蓋二盛院御分、有御封以檀紙、二枚立文之銘

云院御方、被押折上下并、禁裏御分、同前銘、等、召石中辨經

世朝臣布衣令持之、予出簾外、整候二棟南面弘
底、不敷座、經世置蓋於予前、以經世朝臣招出坊
城前中納言院執權奏曰、故院御書等所預置也、
御開眼之後、早速可分進之由、被仰置、而問日
次之處、十七日并二十三日、十七日、御葬礼以
前頗不叶道理、仍所及今日也、抑禁裏御分任
建久又永例、尤可持參歟、而今度事儀、不似兩度
例、可為何樣哉、重可隨被仰下歟者、又自昭訓門
院被申、河句其浦兩庄事、兩庄八條院廳分之内也、然
而件廳分、先年雖被去進院
御方、於此兩庄、有猶為法皇御沙汰、仍又昭訓門院
御一期之間、不可有相違、其由追可被申院、又御一

期之後、ハ可被付廳、故院御書如此、獻覽後可被返
下歟云々、此、次私相語云、建久又永被進、禁裏、以
下、御書ハ、或納手箱封之、然而此度御書
等事儀、不似兩度例、仍不及其儀、中納言取蓋參
之由語之、後定御有甘心之氣、御前了、少時歸來、仰云、故院御書聞食了、内裏
御分事、誠不似先度□□三十日以後、自此
御所可被傳進云云、御書留又兩庄事承了、御
書有御覽被返進之者、次予招經世朝臣、在、近邊、
令持蓋歸參、女院御方、自余御書等、各有御封、
以檀紙被
立文二、押折上
下又有銘等、悉盛宮蓋、
一通 昭慶門院 一通 新院 一通 西殿准后 御親

一通

堀川准俊

一通

二位局

一通

予分

此外予妹

日來松候御所

分、自女院御方被傳遣了、

又令持經世朝臣、出赴御所、東底著座、

當時公卿座此所也、

經世朝臣置莒蓋於予前、退入、

次民部卿下格著

座末、次予招高倉前宰相

在眼路布衣下格

授昭慶門院

御分

被朝臣女院羊預管領之仁也

進入之、

次以經世朝臣進准

后分

以藤朝遣

二品分

堀川准后分民

部卿稱可傳進

受取之、

新院御分予懷中退

出、以狀進之、

兼同御氣色了、

予分同懷中、次以經

世朝臣返上御蓋於

女院御方、次予又參女

(七六)

院御方

女院御分并宮御方御分等被納御手

箱一合

被付御封

被下之、可奉見了入返給云、予

賜之、仰藤朝令納車、

次退出、以主典代資量

書狀令進富小路殿了、

進永福門院

又進入道殿之

御手箱、

以春衡進北山了、

略、中

御方々御處分

雖有禪、為後不包記之、

一通、銘曰禁裏、

備前國長田庄

二品一期可被免知行

攝津國位倍庄

阿波國福井庄

○禁裏
後二條院天皇

讚岐國豐福庄

越後國佐橋庄

右庄々所讓進也

嘉元三年七月廿六日

御判

○院御方
後宇多院上皇

一通、銘曰院御方、

書處分事

院

冷泉殿

藥草院

北白川

(七六)

讚岐國

八條院廳分以別目六進之了

御判

○恒明
龜山院天皇皇子
御母昭訓門院

右於冷泉殿并文庫御一期之後、可讓賜恒明、不
可有違犯之狀、如件、

嘉元三年七月廿日

御判

○新院
後伏見院上皇

一通、銘曰新院御方、

播磨國多可庄

丹波國栗村東西庄

遠江國飯田庄

美濃國麻績牧

(七五)

備中國瀬江庄

右庄々可讓進也、輕微之至、頗雖有其憚、為顯志
不顧恐者也、

嘉元三年七月廿六日

御判

一通、銘曰昭慶門院、

處分

昭慶門院

甲斐國

知行よりあぢ
うゐ候す候

越前國小山庄

大和國波多小北庄御判
目六

備後國殖田庄

○昭慶門院
嘉子内親王
龜山院天皇皇女

○昭慶門院
嘉子内親王
龜山院天皇皇女

冷泉殿御所にて候へきよし、さきより申候し

うとも院へまいり候うへハ、とうくの子細

候まゝ、ざんざん小宮へまいりきて候へとも、

御所にもあり、く候はんをまゝ、わづ御

物をあゝ事は御同くめゝ候へく候御同く

といつくへも女院と一御所みて候へく候故

女院よりすくはるゝられ候御領とも、恒

明の親王へ後ニハまいられ候へく候ふゝて

御四つ里候へき人も候つす、一そちニ御子は

もまゐるへきよし、いづも、申候し事

○昭訓門院
藤原氏子西園寺
實業女
龜山院天皇後宮

さて、院辨ふと申す候事、御心さ
も御同しめ、定て候。

嘉元三年七月廿六日

御判

一通、銘曰昭訓門院、

處分事

昭訓門院

龜山殿

美濃國 御判

淨金對院

寺領目六
在別

常磐井殿

此地入道相國雖讓進愚僧造進之、

(七六)

○常磐井入道
西園寺實氏

常磐井入道讓狀、大宮女院所領等、去正安
三年且進之了、恒明親王幼少之間、悉可有進
退、

嘉元三年七月廿日

御判

此外御領等事、細々御書六通在之、不及書寫、
漏御讓狀之所々、悉可有御進止、宮御方御
成人之間、每更一向可為御沙汰、又事々可
被仰合、前右大臣、予事也、

一通、銘曰親王御方、

處分事

恒明親王

御所并寺院等

禪林寺

安樂壽院

在別園目六

如來壽量院

歡喜光院

在別園目六

此外、或新造沙汰、或屋地等、當時居住輩、一期之後、可有進退、別讓賜帶證文地非口入之限、

兼又冷泉殿御文庫事、御一期之後、可被讓進之由、所申置院也、

昭訓門^院御管領之地、悉被讓進之條、無子細

者也、凡愚僧知行之地、散在所々、可有領知

者也、彼目六在別、三歲小兒心操雖難知、

於事孝行之志不可說

嘉元三年七月廿日

御諱御判

一通

無銘

處分帳中事、雖一事、被仰異儀子細出來可

為不孝事、

一存生之時被仰置之旨、可堅守之由、已被載
御返事了、承諾之詞死生相同、不可被變事、
一未分財、嫡子半分領之、庶子可相分、なと謂
事有之歟、分明分讓上、不可有此儀、不慮事
出來者、以之可相懇關東、乍卧染筆尤狼藉
跡也、恒明親王成人之間、前右大臣可計沙
汰、

嘉元三年八月廿八日

御判

(七六)

一通、銘曰さいちく、

予妹自元
祇候女院也、

處分

さいちく

諸佛院をおく

さぬきの國とみとの庄

るいらを候宮の御方

あまの國ゆきの保

へものち者まいられ

やまとの國とみとの庄

候へく候

ゆつるいらを候御一期の後、本家へる

いらせられ候へく候、

嘉元三年七月廿六日

御判

○西殿准后
談天門院藤原
忠子
後宇多院天皇
後宮
尊親王御母

一通

銘曰西殿

經氏御妹
即親王御母儀法王有寵受被准后宮了

准后

高倉殿

号西殿

讃岐國宅間郷

越前國酒井庄

西谷庄

二れら御分りて候、後二ハ尊治の親王
万いられ候へく候、

嘉元三年四月廿六日

御判

(七六)

一通

銘曰堀川准后

具守御息女也

處分

堀川准后

讃岐國井戸郷

為別納一期知行せられ候へく候、

豊後國古郷山内保足

知行候へく候、一期之後本家へ万いられ

候へく候、

女院御所ニ同宿候へく候、

嘉元三年七月廿六日

御判

宮内省

一通、銘曰二品、景房法師女

さき、も申さるる候とも、このひ代も
ちては免候へし、

花そのどの、あがく御しんとい候へく候、
あり、此庄、一期の、ちハ内裏へまいり

候へきより申へく候、

御ねんくハさと候へく候、と

うしも、

一通宿野庄、これハ心はまりさて佛事の

(七六)

あゝもせられ候へ、本家ハ

あゝハ安居郷、一期の、ちハ本庄まつさ

あゝハの安居郷、一期の、ちハ本庄まつさ

あゝハの安居郷、一期の、ちハ本庄まつさ

そゝあろちう人ハこはて候不とよ、

りやうは申候、

女院御方へよく御ちう候へし、

嘉元三年七月廿五日

御判

一通、銘曰前右大臣、

西園寺公衡

遠江國濱松臨時課役等不可勤仕所讓賜也羊來芳志難謝候故
也、相傳可被領掌、本家役不可有懈怠候狀如
件、

嘉元三年七月廿六日

判

前右大臣殿

又一通、銘曰賜前右大臣、

五旬已後、面々御讓狀等、守銘或持參、或可分
進、太王不讓泰伯、而意在季歷、泰伯三讓季歷、
意在太王、思之、

(七六)

嘉元三年七月廿六日

御判

五旬已後之由、雖被載此御書、御佛事御用途
等沙汰面々可疑申之間、御閑眼之後、任建
久例、早速可分進旨、去月十七日重被仰置
之、仍今日各分進了、

一文永故院御讓狀一向以愚僧為惣領歟、深草
院雖為兄、一事一言不及訴訟、是併被重孝道
故歟、且為先例、非余新儀、所領配分、依多少不
慮噉々出來事、可耻々、可哀々、

伏見院天皇
[伏見宮記錄文書]
案
條々
一 播磨國
長講堂領目録在別
已上新院可有御管領後仁ハ可被讓進禁裡
依御猶子為嫡嗣故也
法金剛院領目録在別

○新院
後伏見院天皇
○禁裏
花園院天皇

伏見院天皇
[伏見宮記錄文書]
案
條々
一 播磨國
長講堂領目録在別
已上新院可有御管領後仁ハ可被讓進禁裡
依御猶子為嫡嗣故也
法金剛院領目録在別

○室町院
暉子內親王
後深河院天皇皇女

當時新院御管領也、不可有相違、熱田社日來未付之愚身令管領、被付總領、始終同可被進、內裡子細同前、

此御領等內少々別有注置之子細、不可有違失、

一 室町院御遺領事 目錄在別

禁裏可有御管領、當時相分半分令管領之、仰達關東一圓雖可^被之領掌、自然送居緒了、道理之至更不可空之上者、早被仰達關東、悉可有御管領者也、

(七六)

○永陽門院
久子內親王、後深
草院天皇皇女
○朔平門院
靖子內親王、伏見
院天皇皇女

此內三箇所、自龜山院被讓進新院了、此條被御相傳為非分儀之上者、雖不可然、始終可為一圓之間、不能辭遁受用訖、關東聞被令計申者、始終可付總御領也、凡此御領事、關東計申之條、令遲引者、以半分許不可事行、歟、任近例、以法金剛院領、且可被進內裏歟、其趣可申置新院也、

一 衣笠殿當時御管領所々、永陽門院御一期不可有相違、於的部北條者、被置故朔平門院追善料所了、永不可有違亂、且愚身沒後事者兼

○永福門院
薛名錄子伏見
院天皇中宮

○中園准后
藤原經子伏見
院天皇後宮
後伏見院天皇母

有仰付之子細、本道上人知行不可有違亂者也。

一永福門院當時御管領所々、御一期不可有相違、於石國庄者、別有申置旨、更不可有違亂者也。

一中園准后當時知行所々、一期不可有相違、始終各可付總領、此內隨便宜可被取替之事等有之歟、追可相計也。

一為兼卿當時知行所々、不可有改動儀、兩御方內裏新院為御乳父、致勤厚、尤可被思食入、子孫致

(七六)

奉公之仁有之者、相傳知行敢不可有違亂、功臣餘胤殊可有優意者歟、越前國和田庄為予追善別所、仰付為兼卿也、子細載別狀、預賜了。

一仰付梅尾惠琳上人、每日法華經書寫事有之、以故院御書為料紙給之、限十三年不可有闕怠之由仰了、當時無捐料足、只隨便宜時之相計許也、如一村有具便事被付之、愚身後生齊事同可相訪之由、被仰會者不可有等閑歟、此所偏自存日可致當來祈之由、先年仰會了、依

有歸依之子細如此所書置也

一男女召仕輩多年扶持之族相構不失活計之
樣可被扶置不忠不調之仁出來者不及子細
然而大段被掩慈愍之叡慮者歸其德自可翻
邪執者也

一長講堂興行間事載別紙了殊可被廻叡慮者
也

一和漢文書已下任所在悉所進新院也至雜物
等不可殘一物也後々ハ皆悉可被進內裏者
也

(七六)

正和元年十二月 日

(御花押)

此狀雖為案文若不慮正文有紛失事者
可擬正文之間故所加判形也

可謂三代之間始於此而漸於此
一、此後雖有天子之命不復有天子之命
五、此後雖有天子之命不復有天子之命

後伏見院天皇

〔伏見宮記錄文書〕七

長講堂領以下讓進花園新院狀案

長講堂領、法金剛院領、付熟田社領等讓進之、可有御

管領、於長講堂事者、後深草院先院御一期之間

有御沙汰、然為有存旨、自當時所申付也、殊致寺

院之興隆、可被專先皇之追修者也、抑愚老管領

所々、始終悉可被讓與量仁親王、為嫡孫、可為領

主之器故也、努力不可有依違之狀如件、

○先院
伏見院天皇

○量仁親王
後伏見院天皇
天皇
光嚴院天皇

正中三年二月十三日

判

為難堂與以下難堂外國諸國諸案
為難堂與以下難堂外國諸國諸案
為難堂與以下難堂外國諸國諸案
為難堂與以下難堂外國諸國諸案
為難堂與以下難堂外國諸國諸案

(七六)

